

「奇跡」の犬 頑張る 勇気

がんに侵されながら、被災地で人の捜索などを行う「災害救助犬」の啓発活動を続ける犬がいる。NPO法人・日本レスキュー協会(兵庫県伊丹市)が飼育する3歳の雄のシェパード「秋桜」だ。「動いているのが奇跡」と言われながら懸命に生きる姿は、多くの人に勇気を与えている。

「誕生日おめでとう。来年もお祝いしようね」

今日12日、同協会の訓練場で、秋桜の世話や指導を担うハンドラー、高木美佑希さん(25)が、秋桜の頭をなでながら声をかけた。

協会が秋桜のために開いた誕生日会。パーティーグッズの三角帽子をつけた秋桜は野菜で作った特製ケーキを一口でぺろり。後ろ足を引きずりながらも、高木さんとうれしそうに散歩もした。3歳になった秋桜を紹介する協会のブログにはこんな感想が寄せられた。

「秋桜、頑張ってますね。後ろ足も立っている姿に感動です。昨年6月、がんの骨肉腫末期とわかり、獣医師に

日本レスキュー協会
1995年9月発足。

東日本大震災や九州北部豪雨など国内外32の災害現場に出動している。災害救助犬の認定に統一基準はなく、協会は海外事例などを参考に、信頼性の高い育成を行っている。

災害救助犬候補 がん闘病



3歳の誕生日を祝って、高木さん(左)から手作りケーキをもらう秋桜(12日、兵庫県伊丹市)＝守屋由子撮影

3歳雄 懸命な姿に「感動」

「動いているのが奇跡で、まもなく歩けなくなる」と告げられてから1年以上が過ぎていた。

秋桜が協会に来たのは2014年秋。がれきの中でもしっかり歩けそうな大きな足と人懐こい性格。約2年かかるとされる災害救助犬の認定に向け、順調に訓練をこなしていた。だが昨年6月、首の後ろの脊椎に骨肉腫が見つかった。「手の施しようがない。痛みを除く緩和ケアを」。それが獣医師の意

見だった。

訓練は中止になった秋桜だが、高木さんは「退屈させるとストレスがたまり、免疫力が低下する」と、なるべく遊び、そばにいろようにしている。昨秋からは協会の啓発活動にも一役買ってもらうことにした。

協会や災害救助犬は、まだ認知度が高いとはいえず、被災地に入る際、自治体に難色を示されたことがある。そのため各地の自治体に出向き、災害協定を結ぶようにしてい

るのだが、秋桜も参加させるようにしたのだ。

今年3月、大阪府太子町が開いた防災訓練では、協会の活動が組み込まれ、がれきを想定したセットで、秋桜は埋まった人をしつかり捜し出した。同町は協会への理解を深め、協定を締結。町安全環境課の課長補佐、池田貴則さん(53)は「秋桜の機敏な動きを見て協定を結んだ」と話す。

月に1回の見学会など、協会の活動は随時、ブログなどで更新され、秋桜に関する多くのメッセージが書き込まれるようになった。

「頑張っている秋桜を見習います。うちの犬もがん。秋桜の頑張りにも勇気をもらった。……。けがを負った災害救助犬の治療などに使う「医療準備資金」への寄付を協会が昨年からはホームページで呼び掛けたところ、必ずミラクルは起きます!」など、秋桜への励ましを書かれた振り込みが相次ぎ、これまでに約200万円が集まった。

「秋桜がいなくて、こんなに集まらなかつた」。そう話す高木さんたちは今月、ある決断をした。秋桜にがんの転移がなく、獣医師も「この生命力なら試してみる価値がある」という放射線治療を始めたのだ。緩和ケアからの転換だ。

「犬はどれだけ人に愛されているかを理解できる動物。秋桜の病気が完治すれば、これまで応援してもらった人たちの気持ちを背負い、立派な救助犬になると思う」。高木さんは奇跡を信じている。